

2 授業「私の目を見て！」

(1) 【「私の目を見て！」の学習に思う】

「私の目を見て！」の授業は、部落差別の中を生きてきた私の思いを初めて真正面から、生徒一人一人にぶつけていった授業である。この「私の目を見て！」の授業は、前日12月13日の午後実施した学年全体により同和問題学習の全体授業を受けて、昨年度のクラス2年B組で取り組んだ授業である。前日の全体授業は、対象地区生徒K子の涙で終わった。K子の発言は、部落に生まれた自分の思いをわかってほしいというものであった。その言葉は涙で途切れてしまったが、周りの生徒に部落に生まれた悲しみを痛いほど伝えていくものとなった。K子はこの授業の朝、担任教師に次のような手紙を書いている。

《私、すごく、同和問題の授業をしているときが一番つらい思いをします。クラスの全員が、私の方を見ているような気がします。また、思うことなんだけど、みんな心の中では、部落出身でなくてよかったと思っています。私だって、中学一年のときは、他人事のように思っていました。でも、いざ自分だったと気づいたときは、とても悲しかったです。そして、とてもつらくて心の中では、これからかくしていこうとさえ思っていました。これが差別心なんですよ。私みたいに考えている子がたくさんいるから、差別がなくなるんです……。》

このK子を始めとする同和問題学習の中で揺れる生徒、その中にある自分の思いを仲間に向かってほしいと願い、必死に自分の思いを語ろうとする生徒、それはK子だけでない。不安や悲しみの中で揺れるK子たちの思いに応える授業をしなければ、そんな決意が全体授業の最後の場面で私の心の中に燃え上がっていく。

私は初めて部落差別の中を喘ぎながらも、必死に生きてきた自らの思いを生徒たちに真正面からぶつけていった。私は1990年12月14日、生徒の必死の叫びに応じて、私は今までどうしても越えることができなかった大きな峠を越えることができた。その峠とは、部落に生まれた自分の悲しみや苦しみを訴えることであり、その苦悩の中から同和教育の実践を自分の生命の営みとして、同和教育に取り組む喜びをつかんできた自分の生きざまを生徒一人一人にぶつけていくことであった。今までは、さりげなく何気なく自分が部落出身の教師であることは語ったことはあった。しかし、50分の授業を丸々むきつけにひたむきに自分をさらけ出したのは初めてであった。

私の心の中は、部落差別の中で苦しむ生徒の思いを肌で感じるにつけ、私もその苦しみの中に飛び込んで行って共に闘わねばという思いでいっぱいになっていた。部落差別の現実にはえ苦しむ生徒たちの声は、今も目を閉じると私の心の中でこだまする。その声が聞こえる度に私は思う。

「負けるな。逃げるな。みんなは今、人間としてすばらしい生き方をしているんだ。そのことを誇りにして、決して卑屈にならず、今の生活、これからの生活を堂々と胸を張って生きていけ。みんなの生きざまは、必ず感動を呼び。すばらしい仲間を生んでいく。共に頑張っていこう。」

私の心にはいつもこの熱き思いが煮えたぎっている。この熱き思いを生んでいったのは、この「私の目を見て！」の授業であり、私に本当の思いをぶつけてくる生徒たちの姿があったらだ。この「私の目を見て！」に込めた願いは、いつまでも私の中に生き続けるだろう。

本年度3年B組の授業記録の一つ一つの中にも、「私の目を見て！」の授業に込めた願いが生きている。この授業記録は生涯の宝物である。

(2) 【授業記録】主題「誇りうる生き方を求めて」

2年B組『私の目をみて！』授業記録

1990年12月14日（金）4時限

板野中学校 2年B組

指導者 森 口 健 司

T₁：昨日、D組の公開授業の後、2年生全体で『私の目をみて！』についてのいろいろな意見や、同和問題学習についてのいろいろな考えを発表してもらったんですけど、私は今もあのときの感動で胸がいっぱいです。授業が終わった後、授業の最後に涙をこぼしてしまったKMさんを取り囲んで何人かの女子が、それぞれの思いを語り合っている姿を私はじっと見ていたんですけど、あのときみんなで同和問題を自分たちの問題として真剣に考えていこうとする集団が、できつつあるなあという思いでいっぱいになりました。私自身、この問題に関わる切ない思い出がいくつかあります。同和問題を学習するとき、部落問題に関わって傷のある人は、苦しくつらいという思いからスタートしていると思います。私も、父親や母親、祖父、祖母の差別の中を生きてきた思いがわかったとき、本当に口惜しいつらい思いになった思い出があります。特に私の祖父はとても厳しい人です。その祖父が私の前でただの一度だけです。部落問題の話をしているときに、涙を私の前で初めて見せました。もう80歳になりますけど、私はもう生涯祖父の涙を見ることがないと思います。その涙はまさしく部落差別に関わる口惜しい思い出、いくら頑張ってもどうにもならなかったことを思い出し、その歯がゆさ口惜しさがこみ上げてきて、私の前で涙をこぼしました。

T₂：差別の現実、今はなかなか見えにくくなっているけど、まだ解決していない厳しい現実があります。そのことをもっともって勉強していくんです。この問題を勉強していくということは、部落の人間にとって苦しいです。自分自身の傷をせせくられるようで、つらい気持ちになっていきます。みんなの友だちの一人が書いた文章にこんな一節があります。「先生、私は同和問題の勉強をしているときが一番つらい気持ちになっていきます」と記しています。同和地区に生まれた仲間の中には、こんな気持ちでいる仲間が何人かいると思います。できるならば、このことについていつまでもふたをしておいてほしい。このことは本当につらいんです、このつらいことは考えずにいたいんだ。そんな気持ちでいる人も少なくないと思います。でも、今も結婚の問題をはじめとする多くの差別がある以上、このまま放置できないんです。特に結婚に関わって、差別はいけないといっていた人が、結婚の問題だけは違うんだといって、見事に差別者となっていく、そんな悲しい事実を私はたくさん知っているんです。そして、今もその問題に関わって心を痛めています。口惜しい思いをしています。

T₃：私はそんな口惜しい思いをバネとして、差別を許さない学習に自分のすべてをぶつけていきます。4月からいろいろな資料を通して学習してきた。そして、昨日6時間目の学年全体からいろいろな意見が出た『私の目をみて！』の授業を振り返って、みんなの資料に寄せる思い、昨日みんなの腹の中にぐっと沸き起こったことをみんなに語ってほしいと思うんです。

T₄：丸岡忠雄さんの詩『ふるさと』の話をしたことがあります、私のことを部落の人間であ

ると知っている人と、この同和問題の話をしていくことは、とても話がしやすいんです。でも、私のことを部落の人間だと知らない人と同和問題のことに話題がいったとき、いつ私が部落の人間であるということを切り出していこうか、今も戸惑うことがときおりあります。ふるさと、自分の生まれたところを語っていくということは、部落の人間にとってつらいです。なかなか言えないです。資料にえがかれた勝子もそうですね。勝子の自分の出身地が言えない気持ちをみんなはどうとらえてくれたか、そのことについてみんなが思うことがあったら、最初に発表してください。

SN (女) : 勇気がたりなかったのかもしれませんが、でも、自分が部落出身であることを言うのに特別な勇気がいるのは、まわりが差別しているからで、差別がなければ出身地を言うのに勇気なんていらなはずだと思います。

T₅ : 自分の生まれたところ、出身地を言うというのはごくあたりまえに、自然に言えるものでなければならないはずですね。勇気を出さなければ出身地が言えない、そのことがおかしいということですね。

KT (男) : ぼくも、勝子さんが自分の気持ちや出身地が言えないのがおかしいのではなくて、言いたくても言えないくらい部落差別はきつくこわいものだと思います。いくら頑張っても差別はより厳しくエスカレートして、むやみに口に出すと、どんなつらい目に合うかもわからない、そのぐらい差別がきつくて勇気があってもなかなか言えないんだと思います。

T₆ : 今の意見についてどうでしょうか。

YY (女) : 自分の出身地を言えないのは、すごくつらいことだし、言わせない部落差別の厳しさを私は感じます。

T₇ : 言えないのではなく言わせない厳しさ、またこの問題を学習したときに部落の人たちを悲しく切ない思いにさせていく。何ですかねえ、それは人の愛を引き裂いたり、幸せを奪ったりする差別が胸はって自分の生まれ育った、自分にとって大切な場所すら言えないようにしているんですね。

MS (女) : 私も勝子が自分の出身地を言えなかったのは、言おうとしてもまた言いたくても、言ってしまうと職場で差別されるかもしれないという気持ちもあっただろうし、同じ中学校の仲間もいなくて、一人になったつらさもあったからだと思います。

YK (女) : 「職場でどうたたかっていたら」と資料の最後のところで勝子さんが言っていたけど、私は勝子さんは勝子さんの思いを言っていかなければならないと思います。

T₈ : 言わなければ解決していかないということ、それと言えないということが問題であるということ。あとどうですか。

MO (女) : UKさんと同じで私は言うことによって、みんなわかってくれると思います。

TK (男) : ぼくもみんなに訴えていくことによってわかってくれると思います。

SN (女) : けど、私は愛子さんに勝子さんが言ったときに愛子さんはわかってくれなくて、表面的に差別はないでしょうとごまかしたように、言ってもわからない人は多くいると思いま

す。だから、なかなか言えるものではないと思います。

J K (男) : 言にくいことだけど、わかってもらうためにはまず言っていかなければならないと思います。

T N (男) : ぼくも出身地が言えないのが悪いのではなくて、言えないようにしているまわりの人たちが悪いんだと思います。

M H (男) : 勝子さんは言ったらいじめられる差別されるということを知っているからこそ、なかなか言えないんだと思います。

C M : 私も、出身地を言ってしまったら、差別されるだから言えないんだと思います。

T₉ : 言わないのではなくて言えない。差別があるから言えない。しかし、愛子さんとのやり取りの中で勝子は語った、必死に訴えた。この勝子の気持ちを考えてみたい。訴えた勝子についてみんなが思うことを発表してください。

K T (男) : 愛子は自分が差別していてもしていることに気づいていない。多くの人が差別に苦しんでいるのに、苦しんでいることすらわからない愛子に、勝子は腹が立ったんだと思います。そして、愛子に差別されている人は本当にこわいのか、差別している人は本当にこわくないのか、そのことをわかってほしいという気持ちが勝子を必死にしていっただんだと思います。

S N (女) : K T 君と同じような意見なんだけど、愛子さんにちゃんと自分たちの本当のことをわかってほしいと思ったからこそ、必死に訴えたんだと思います。

M K (男) : 勝子は我慢できなくなったんだと思います。しかし、感情が高ぶっていても、出身地を言うのはすごく勇気がいることなんだと思います。

Y T (女) : 勝子が本当のことを語ったとき、勝子は偉いなあと思いました。私だったらどんな状況になっても、差別されるのがこわくて出身地を隠していくと思います。勝子さんはすごいです。

Y Y (女) : やっぱ勝子は、愛子さんに出身地を語るのにすごい勇気がいったと思います。それで、もし私が勝子さんの立場ならこれから差別を受けるとわかっていても、必死に自分のことをわかってもらおうと打ち明けたと思います。

N N (女) : 愛子さんに向かって勝子さんが訴えている姿に感動します。私にはできないと思います。でも勝子さんが頑張っているようすを見て、私も頑張らなければと思います。

M F (男) : 勝子さんは、愛子さんが言っていることは間違っているということを心からわかってほしかったと思います。

M N (女) : 私も、自分たち部落の人間を同じ人間とわかってほしいという気持ちから勝子さんは訴えたんだと思います。

C K (女) : 私も、本当のことをわかってほしいから必死に訴えたんだと思います。

T₁₀ : 同じように「うん、うん」と相槌を打ったら隠せるんですね。でも隠さない、その行為について、その姿についてどう思いますか。

MM（男）：たくさん勉強していたから、同和問題に対して相手にわからせる力があつたし、本当の勇気が育っていたから隠さず、本当の気持ちと言えたんだと思います。

T₁₁：たくさん勉強していたとはどういうことですか。

MM（男）：やっぱり部落差別の厳しさや同和問題とは、どういうものであるかを中学時代に山嵐学級の仲間と、自分の生き方としてしっかり勉強していたということです。

T₁₂：たくさん勉強していたから、自分をごまかすことなく言えたというMM君の意見についてどうですか。

SN（女）：やっぱり、初め出身地が言えなかったのは、勉強していても中学時代の勉強があまり役に立っていなかったと思います。だけど、愛子さんがあまりにもひどいことを言うので、段々と腹が立って本当のことをわかってほしくていったんだと思います。

T₁₃：腹が立った、その腹立ちとは何だろうか。

CM（女）：部落のことで本当のことがわかっていないのに、部落の人を差別していくことにわき起こってきた怒りだと思います。

T₁₄：差別していく人を許せない。そのままにしておけないという怒りや腹立ち、それが勝子に勇気を与えていったということですか。他に意見ないですか。

TN（男）：やっぱり、いつまでも自分の心の中に隠しては、本当にわかってもらえないし、何にもよくなっていかないということがわかっていったから、はつきり訴えていくことができたんだと思います。

HM（男）：ぼくは勝子さんは、もうこれ以上自分みたいに差別される人をこの工場内でつくりたくないという思いがあつたから、自分のことを語り訴えることができたんだと思います。

T₁₅：私自身こんな場面を経験したことが何度もあります。私を部落の人間と知らず、私の前でこんなことがよく言えるなあと思うくらい、部落の悪口を言う。そんな場面を教師になってからも何度か経験してきました。昨年もありました。あるお宅へ用事があつて行ったとき、偶然その家にきていた近所のおじさんと話をするようになりました。そのおじさん、ある話から私に突っかかってきました。私を部落の人間とは夢にも思わなかったんでしょう。こんなことを口にされました。「学校で同和教育やしいまわるけん、部落の人間がつけあがるんじや。今は差別は逆じや、わしら差別されよんじや、部落の人間に問題がある、部落の人間が悪いんじや」そんな言葉が、私に向かって飛んできました。20分ぐらい静かに聞いていました。悲しくなって、やがて震えるぐらい腹が立ってきました。腹が立って涙が出そうになりました。この資料と同じですね。私が人間として同和問題解決に情熱を燃やす教師として、本物かどうか問われているそう思いました。静かに語っていききました。おじさん、それは違うよ、私は部落に生まれたけど、こう生きてきた。私の親は、私の家族は、私に頑張つて生き抜いてくれという祈るようなさまざまな願いや思いを託して、私を育ててくれた。私の部落の多くの仲間が、今いろんな苦しみをかみしめながらも前向きに一生懸命生きている。私の胸の中にこみ上げてくるいろいろな話を、本当に穏やかに静かに、しかし、はつきりと

語っていきました。そして、最後にこんな話をしました。部落の中にも悪いことをする人がおるかもしれん、でも、部落でない人の中にも悪いことをする人がおるでしょう。それなのに、部落の人間が一人悪いことをしたら、部落全体が悪いときめつけていく。でも、部落でない人が悪いことをしたときは、その家だけのことであり、その人、個人のことで納得していく。一人の部落の人間の問題を部落すべての問題としてすり替えていき差別している。そのことをわかってほしいんです。そんないろいろな話を2時間程続け、わかってくれたかなあ、どうかなあという思いの中で、その日は別れました。1週間ぐらいしてから連絡がありました。その家の人を通じて、またいつか逢いたい、話がしたいと連絡がありました。2ヶ月ぐらいたって、同じ家で逢いました。初めて会ったときは別人のように穏やかな顔で私に挨拶をしてくれました。その日、しみじみとお前と話ができてよかったということを語ってくれました。

T₁₆：そんな場面がこれからのみんなの人生の中で数限りなくありますよ。私は部落に生まれた、私は部落に生まれなかった、立場は違うかも知れないけど、相槌を打って流されていくか、その場の雰囲気が悪れようがしっかりと間違いを指摘していくことができるか。そんな人間としての値打ちが問われる場面がいっぱいあると思うんです。

T₁₇：学校もそうですよ。だれかを痛めつけて仲間外れにして、仲良しになっていくことができる、そんな集団があつたら、それはおかしいですよ。おかしいことがおかしいといえる勇気がいると思うんです。勝子の勇気をもろうて、私たちは生きていかなあかんと思うんです。そして、勝子は愛子とのやり取りの中で「私の目をみて」と言った。その眼には涙です。涙を流しながらも「私の目を見て」と言った勝子の勇気、「私の目をみて」という言葉からみんなはどんなことを思いますか。

SN（女）：目の前のこと、部落問題に目をそらさないで真剣に考えてほしいという思いが、「私の目をみて」という言葉になったんだと思います。

YO（女）：どれだけ自分が真剣に言っているのか、わかってほしかったんだと思います。

NI（女）：本当に差別がないのか、どうかということをわかってほしかったんだと思います。

YT（女）：差別の悲しみをわかってほしかったと思います。

KT（男）：「私の目をみて」という言葉には、私もあなたと同じ心を持っている、それなのにどうして差別されなければならないのかという気持ちが込められていると思います。

KI（女）：勝子は愛子に自分の本当の気持ちをわかってほしい。それが「私の目をみて！」という言葉になったんだと思います。

MM（男）：KT君が言ったように差別される人間の口惜しさや悲しさを心からわかってほしいという気持ちがあつたと思います。

TK（女）：勝子自身も、絶対差別から逃げないという決意がこの「私の目をみて！」という言葉に込められていて、これからは差別とたたかい続けていくと訴えていると思います。

TN（女）：ほくもKT君の意見に似ていて、部落の人を差別しているのは、絶対に間違ってい

るということを心からわかってほしかったんだと思います。

RN（女）：愛子に差別する心をなくしてほしいという願いが、「私の目をみて！本当のことをわかって」という言葉になったんだと思います。

T₁₈：でも、勝子が生きていく戦場というのは厳しいですね。昨日の授業の中で、C組のY Iさんが話をしたこと、KSさんが後半語ってくれたこと。『私の目をみて！』を今回勉強したこと、部落問題を学ぶということは何なんだろう。どんな意味があるんだろうか。

T₁₉：この中にも、「先生、この勉強するんほんまにつらい」という人がおると思います。また、「この勉強は必死になってやらないかん」という気持ちになっている人もいます。同和問題を学ぶということは何なんだろう。どんな意味があるんだろうか。重苦しいつらい気持ち、ほつといたら、そつとしといたら自然となくなっていくんでないんという気持ち。私にもそんな気持ちがかつてなかったとは言えません。でも、この学習を深めていく中で、それは違うんだ、わが生命の営みとして、自分の生きていく使命として、この問題に必死に取り組んでいくんだという思いが生まれてきて、私は毎年、年がかわるときに新しい年の手帳に一つの詩を書き続けているんです。その詩と出会ってもう6年ぐらいになります。その詩は、『よろこび』という西口敏夫という先生が書かれた詩です。

《よろこび》

部落で生まれ、
部落で育ち、
部落でくらし、
運動と教育にいのちをかけて六十年。

或るときは、烈火の叫びとなり、
或るときは、草にすだく虫の声となり、
或るときは、鋭く差別の事実に迫り、
或るときは、静かに差別の矛盾を訴えた。

このみちは、きびしい荊の道なれど、
この道はわが生涯のつとめなり。

ゆくさきは、幾多迫害ありとても、
この営みは、わが終生の、運命なり。

しかして、この営みは、
わが生命の生きがいにして、
わが生命のよろこびなり。

T₂₀：部落差別を解消していく営み、それは人間として生きる喜びなんだという、私の生涯の宝物である詩です。この問題を勉強していくということは、どんな意味があるのか、たとえば学習会がある。どうして学習会があるんだろうと悩んでいる人もいるでしょう。この問題に関わって、今みんなが思っていることを今日の授業の最後に発表してほしいと思うんです。

YK（女）：今、先生が学習会について話を出してくれたけど、私は学習会についておかしいと思っています。小学校のとき、友だちについて学習会にいったとき、私はあのときは一緒に勉強しようという気持ちでついていったのに、YKさんはこんでいいけんといって、先生に帰されたことがあったので、私はおかしいと思い続けています。

T₂₁：学習会は、先生が中学2年のときに県下の同和地区のある学校のほとんどで実施されるようになったんです。学習会の大きな願いの一つは、部落の子どもにしっかりと同和問題の勉強をさせていくということなんです。私も、中学当時、学習会場で部落はなぜつくられ、どのように差別が残されたかということを知り、自分は部落に生まれた人間としてどのように生きていくかということを知り、部落の仲間と共に語り合った思い出があります。学習会は差別の中を生きていかなければならない部落の子どもたちに、部落の人間として、どのように生きていくかという自覚を持たせ、部落の仲間がつながり結び付いていく、そして、共に励まし合いながら生きていくという話し合いをする場であると思うんです。

T₂₂：それともう一つの願いは部落の生徒に学力をつけるということです。学習会ができる前より、社会には部落差別が厳しく存在し、部落の進学率は、徳島県全体の進学率と比較して、20～30%ひらいていたんです。そして、今もまだ8～10%のひらきがあるんです。その差がなかなか縮まらない。それは差別があるからなんです。そんな二つの願いを持って学習会が実施されています。部落の子どもたちが中心になって、部落問題を解決するために学習会があるということをわかってほしいんです。この学習会に関わって何か意見があったらお願いします。

YY（女）：私自身、小学校の低学年の頃から学習会に行っていたんだけど、自分自身が部落に生まれたということを知らなかった、しんたいなあというだらけた気持ちで行っていたとき、あるとき先生が「あんたら、どうして学習会にきよるかわかるで？」と言われたので、私は軽い気持ちで「そんなん知らん」と答えたら、先生が「あんたらは部落に生まれたから学習会に行っているんですよ」というふうに言われたんです。でも、そのときは部落というのは、どんなものか知らなかったで、そのままなんとなくしかわからない状態だったんだけど、5年生のときに、また先生から「部落に生まれたことを誇りに思え」と言われたんです。でも、どうして誇りに思わないのかのか疑問に思いよって考えてきよったんだけど、最近思うようになったことは「部落以外の人には部落差別というのは受けたことがないと思うんです。部落差別を受けた部落の人たちしか、部落差別を受ける気持ちというのはわからんと思うから、その気持ちを自分のまわりのいろんな差別に対してぶつけて改善していかなあかん」という気持ちが自分にわいてきて、ほんで「ああ、学習会はすごい大事なもののなんやなあと思

うて、それから学習会という自分にとって大切な時間をおろそかにしてはいかんなあ」と思うようになりました。

T₂₃：今のYYさんの意見について思うことを発表してくれる。

SN（女）：私は前まで学習会は、ないほうがいいと思っていました。私自身も差別心があって学習会に行っている子を見たら「ああ、この子も部落の子やなあ」と思って、学習会は部落の子と部落外の子を分けているようであまりいいことはないと思っていましたが、YYさんの話を聞いたら、学習会は差別をなくすために近道というか、とても大切なところなんだと思えてきました。

T₂₄：学習会が部落と部落外を分けていくのではなくて、学習会が学校の同和教育学習の核となつて、より部落と部落外の思いと意思をつなぐ、連携を深めていく、部落差別をみんなでなくしていくんだという同和教育推進の中心に学習会が成立していかなければならないと思うんです。他にどうですか。

JK（男）：差別している人は、自分が部落に生まれたらどんな思いでいるかということを考えて、差別を受けている人のつらさを一つでもわかったら差別する心はなくなっていくと思います。

MS（女）：私も学習会は、いろんな先生が学習会にいて差別に立ち向かって生きていくように、勉強していかんかと進めてくれるから、ほんとは心の中で行かないかんと思うけど、やっぱりどこかに差別があつてなかなか行くことができません。

RM（女）：私も、学習会に対しておかしいなあと思っています。小学校のときに私が学習会の会場に行ったら、先生に帰りなさいと言われて、どうしてきたらいかんのかなあと思っていたことがありました。でも、YYさんやみんなの話を聞いていると、今まで部落の子は自分とは違うんだという気持ちがどこかにあつて差別をしていたと思います。

T₂₅：私は昨日始まったと思います。昨日の6時間目に本当の同和教育が始まったと思うんです。本当の意味で、わが生命をかける教育は昨日始まった。決して許さないという、差別しないと言うだけではない、差別できないという思いをすべての人間の生き方にしていく、そのためにこのことを徹底的に学んでいく。何が間違っているのかということ徹底的にわからせていく力、わからせていく営み。今していることで涙が出そうになる。それは差別があるから、このことがこの思いが胸張って話していける学校や学級や、そしてそういう社会をつくっていく。そのためにこの営みを続けていく。みんなは、私の大切な仲間なんです。何を求めていくか、もつともつといろんな話を続けていきたいし、みんなの思いをしっかりとまとめていきたいと思っています。一生懸命に発表してくれたみんなにありがとうという気持ちでいっぱいです。私は絶対に負けない、生命をかけて生命終わるまでこの教育に頑張り続けます。終わります。

(3) 【資料】

私 の 目 を み て ！

駅から、バスにゆられていくと、やがて、たんぼのなかに、美しい工場の棟のたちならんでいるのが、目のなかいっぱいにとびこんできました。

くあすこで、今日から、勝子の新しい生活が始まるのや！あの工場の門のなかに、なにが勝子をまっているのか……> 生れてはじめて、あの川のある部落からはなれ、父母のところから巣立ってきた一羽の小鳥のような勝子は、期待に胸をふくらませています。しかし、そのふくらんだ胸のなかにも、かすな不安がよぎるのです。そこには、おそらく差別がまっているだろうからです。

こんどはクラスのなかまはいないし、勝子はひとりぼっちです。

今朝、家をでるとき、母は、着がえなどをいれたボストンバックをもって、市電の停留所まで送りにきてくれたけれど、父は、だまったままでしきいをまたぐ勝子の顔をみつめていたのです。あのときのあの父の顔が、勝子の目にうかんできます。市電に勝子がのりこむとき、ボストンバックを手わたしてくれながら、

「勝子。気嫌ようして、みんなにかわいがってもらうのやで……」

といってくれた、あのときのあの母のかすれ声が、耳によみがえってきます。

勝子は、そのとき、鼻の奥がツンとなって泣けそうになったのです。勝子はそれをこらえ、心のなかで、（かあちゃん、おおきに。勝子はがんばるでエ……つよく生きぬくでエ！）と誓っていたのです。

勝子といっしょに、この日、この織物工場の門をくぐった中卒生たちは、五十人近くもいました。

「新しく入社したみなさんに、全工場あげて期待しています」という、工場長さんの訓話をきいたあと、勝子たちは、寮に案内されました。寮

は、廊下をまんなかにして、両側にアパートのように部屋が並んでいる二階建ての木造でした。

一つの部屋に六人です。新入社員のものが、一人づつはいることになったのです。寮母さんから

「今度入社された勝子さんです。みなさん仲よくしてあげてくださいね」と紹介されて、勝子のはいった部屋には、もう三十ぐらいの人が一人いて、あとの四人は、

勝子より二つ三つ年かさの人たちでした。

部屋の人たちは、みな親切でした。押入のあいたところを、使うようにといってくれます。そこには、会社から貸与される布団も一組入っていました。

「わからないことや、困ったことがあれば、いつでもいって下さいね。こうして一つ部屋でくらすことになったのですから、お互い助けあっていきましょうね。」

いちばん年かさの春江さんがいってくれます。一人一人、名前と出身地を自己紹介してくれました。春江さんは島根で、あとの人たちは、鳥取と香川の人が二人ずつでした。

「勝子さんは関西ですって……」

「はい。関西ゆてもひろいでしょう。X市なんです」

「わあ、X市って観光地で有名なところやろ。私、修学旅行にいっただけ。X市のどのへん」

陽子という香川の人が、はしゃいでたずねました。

「名所の多い……そんな街のなかとちがうの……もうはずれの……つまらんところですよ」

どうして私は、あの川のある部落の地名をいわないのだろう。みんな遠くはなれた県の人たちだもの、わかるわけないのに……。山嵐先生おこるやろな。学校では、あれだけえらそうにいつてきた私が、こうして、つい部落のことをかくそうとしてるんだもの。勝子、平気でいればいいじゃないの……。という勝子自身の声が、勝子をしかりつけている……。

しかし勝子はついにそのことをいいだせなかったのです。

やがて、一ヶ月の養成期間が終わりました。養成期間の間は、機械のつかい方の講義や、実習などがありました。はじめて工場へはいつて、勝子はびっくりしてしまいました。養成係の男の工員さんから説明されても、なにをいつているのか、ぜんぜん聞えないのです。糸を巻いたコマがくるくるまわり、機械がカチャンガチャンとあがりさがりするにつれて、真白な布地がのびていくのです。

“さあ、私も、仕事らしい仕事ができるぞ！”勝子の胸には闘志がわいてきました。

作業もだいぶ覚えられて、職場の人とも仲よしになってきた、ある日曜日のことでした。勝子が洗面所へいくと、いつしよに入社した隣の部屋の愛子さんがタオルで顔をぬぐっていました。

「おはよう」をいいかわしたあと、彼女は声をひそめて、

「勝子ちゃん。この会社に部落の人、たくさんいてんのやつて……」

と話しかけてきました。勝子の、いきおいよくうごいていたハブラシの手がびたりととまってしまいました。とうとうきたのだ。私が、人間として値打のあるものであるか、どうかがためざれるときがきたのだ……。つめたいものが背すじを流れていきます。

「なに？ 部落つて……」

勝子は、いつしようにけんめい、たかぶってくる感情をおさえながらいいました。

「勝子ちゃん、知らんの」

「うん」

「平民の下のものやがな」

「ふうん。まだ平民つてあつたのか……」

「ようゆうでしょう。部落つて……まさか、あんたじゃないやろね」

勝子は、なんとかして笑顔をつくろうとしますが、どうしても顔がこわばってくるのです。

「……」

「まさか、あんた……」

「もし……、もし、私がそうやったら、どうするの」

勝子は決心しました。かくすことはないのです。恥ずかしがることはないのです。

「そんなことないでしょう」

「そうやったらどうするの」

勝子の声は荒くなってきます。感情のたかぶりを、おさえようとしても、おさえきれないので

す。

「そんなことない。そんなことないわ……。でも、もしそうだとしたら、ただの友人なら、な

んともないけど……。それ以上はかなんわ」

「それ以上ってなんのこと」

「たとえば異性の人やったら考えなおすわ」

「どうして？」

「どうしてって、こわいもの……」

「どうして、こわいの……」

「みんなが、そういつているもの……」

「それは、愛子ちゃんの入先観とちがうか……。 (いうのだ、はっきりいうのだ) それが証拠に、この私がこわい」

「……」

愛子の顔色が、かわってしまいました。とたんに真剣な表情になったのです。

「いままで、私とつきあって、こわいと思ったことあった」

「ううん……」

「部落というのはね、徳川時代にあった、あの士農工商という身分制度なのよ。この四つの身分よりまだ下とされてたのよ。幕府が、百姓町人を、牛のように働かせるために、上みてくらすな下みてくらせ、部落のことと思ったら、おまえらはましだといって、支配しやすいように、こさえたものよ。その人たちの子孫をいまだに差別しているのよ。それはまちがっているのよ」

勝子は、だんだんおちついてきて、中学校でならったことをしゃべりつづけました。

「でも勝子ちゃん、今の時代にはもう差別はないでしょう」

愛子は、うつむきながらいました。

「あなた、いま異性なら考えなおすっていったじゃないの。それが差別の証拠よ」

「けど……あなたが、そんなとこの人って信じられないわ」

「じゃ、私の目をみて」

勝子の目には涙がたまってきました。泣いてはいけない、そう思い、こらえようとするのですが、涙はあふれて、頬をつたっておちました。愛子は、ちらと勝子の眼をみあげましたが、すぐ目をふせてしまいました。

「私、あなたにいいたいの、あなたは部落のことをなんにも知らずに、差別してるんだわ。私、いままでも、別にかくしてたんじゃないのよ。いいだすチャンスがなかっただけ……。私、きつと、あなたにわかってもらうわ。根くらべしてでも、わかってもらうわ。あなたが、まちがっているってこと……。今日はこれだけにしとく、ハイキングにおくれるから……。さあ、愛子ちゃんもいそがなくっちゃ」

そうはいったものの、こんな工場のなかで、どうたたかっていけばいいのか、勝子にはわかりませんでした。

部屋へ遊びにやってきた、二階にいる雅子さんが、陽子さんたちとしゃべっていましたが、「MさんとYさんが、そうやって……」などと情報を告げて、わいわいといったりします。それを聞くにつけても、もうじつとしておれません。千七百人の従業員全体に対してどうたたかったらいいのでしょうか。

(被差別部落のたたかい 土方 鉄著 新泉社刊より)

(4) 【「私の目を見て！」の学習を土台として】

授業者 森口 健司

1990年12月14日第4校時、2年B組での「私の目を見て！」の学習は、私のすべてを明確に生徒一人一人にぶつけていった授業である。この授業は、生涯忘れることはない。これほど露骨に自分をさらけ出した授業は初めてである。今までなかなか越えることができなかった峠を越えた12月14日、この日は私自身にとっても大きな一歩を踏み出した一日となった。授業が終わったとき、私の背中にのしかかっていた重荷がなくなった感じがした。私の歩むべき道がはっきりと見えてきた。そんな感じだった。これで何も恐れるものはなくなった。徹底的に同和教育に自分をぶつけることができるんだと思った。まだまだ道は険しいだろうが、この確かな一歩を大切にしていきたい。

この授業は生徒にとっても鋭くその差別心を突き刺す授業となった。翌日2年B組の生徒たちの記してきた生活ノートを読んだとき、部落に生まれた生徒、部落に生まれなかった生徒、そのすべての生徒の重荷をとってやりたいと思った。そのためにもっともっと頑張らねばという気持ちでいっぱいになった。この生徒たちの思いをしつかりと担ぎながら、いつその頑張りを続けたい。生活ノートのいくつかを紹介する。

《口で差別はいけないといいながら、心の中は差別していた》

(A夫)

今日の授業の話の中に逆差別という言葉がありました。先生の話聞いていたら、それは違うということがわかりました。部落の人が何か起こしたら、部落全員が悪いということになっていくと先生が言ったけど、ぼくもそう思ったことがあります。でも今思うとはずかしいです。それは、ぼくは部落差別をしていたからです。口で差別はいけないといいながら、心の中は差別していたんです。ぼくは自分のことが情けないです。ぼくのような思いをしていたら、差別はなくなりません。だから、ぼくはもっともっと部落差別のことについて勉強して、それは間違っているときっぱり言える人間になります。

《心の奥底にあることを話し合うことができてこそ、本当の友だち》

(B子)

今日、はじめて部落問題について友だちと話し合いました。友だちには内面のことも話し合える友だちと、表面だけで話す友だちが私にはいます。今日、部落問題について話をしたY〇さんは私の内面も話し合える大事な友だちの一人です。Y〇さんも、今日の授業が終わったとき、涙を浮かべていました。私と同じことを感じていたのです。うれしかったような安心したような気持ちでした。本当の仲間だと深く深く思いました。この人の言葉がジーンときたとか、いろいろ話をしました。先生の言う通り、そんな心の奥底にあることを話し合うことができてこそ、本当の友だちだなあと感じました。Y〇さんといるととても安心します。いい友だちです。

《勉強しなければならないのは、差別者の方だと思う》

(C子)

今日の授業は本当によかったです。今日のはじめて心から同和問題について考えたような気がし

ます。先生は、D組の公開授業から、本当の同和問題の学習が始まったと言っていました。私は今日の授業でそう思いました。はっきり言って今までとは違うものを感じました。本当に今、書いている文章は口先でなく、正直な私の本当の気持ちです。私は同じ学年で、部落問題で悩んでいる子がいるとは、今まで知りませんでした。部落だと自分で気付いても平気だと思っていた。私は部落差別を甘くみすぎていたんです。YYさんの話、先生自身の話、詩の話、この三つの話を聞いているとき、不思議と涙が出ました。その涙が感動の涙なのか、同情の涙なのか、悲しみの涙なのか、他の涙なのか、私にはわかりません。ただ目に涙が浮かぶばかりでした。学習会のことを言っていたとき、なぜ部落の人が勉強しなければならないのか不思議に思いました。勉強しなければならないのは、差別者の方だと思うんです。発表しようと思いましたが、勝子さんのような勇気がなく、とても残念でした。本当に今日はとてもいい授業でした。

《自分の生まれた家の住所を言うだけでも、たくさんの勇気がある》 (D子)

今日の授業、胸がいっぱいになって涙が出てきた。今までにない悲しさ、腹立ちがこみ上げてきました。こんなに真剣になれた授業は、本当にはじめてでした。

先生の話にとっても心をうたれた。先生自身の体験を笑顔で話していた先生。でも、心の中は少しつらかったと思います。そんなことを考えながら聞いていると、顔が熱くなって、涙が出てきました。YYさんの話も、同じような気持ちになりました。あのときYYさん、とても勇気があったと思います。そして、つらかっただろうと思います。かすかに声がふるえていました。話を聞いていると、なんだか身体がばらばらになったような心地がしました。差別していた心がこわくなりました。

「生命をかけて、生涯、この問題に取り組んでいく」と先生が言った言葉がまだ頭の中に残っています。私も思いました。自分の生まれた家の住所を言うだけでも、たくさんの勇気がある。というような必要のない勇気をもたなければならない人たちをふやしたくありません。

NIさんと約束しました。「差別なんか絶対にしない」って。約束したからには守りたいと思います。

《学習会に行っている私からなくさなければ》 (E子)

私の最後の意見、長つたらしくなつたけど、たまっていたものが全部出せてすっきりしたような気がします。やっぱり授業のとき言ったけど、部落差別っていうのは、部落に生まれた私、学習会に行っている私からなくさなければいけないと思います。だから、すごく勇気があることやけど、私から頑張って差別に立ち向かっていこうと思います。

《涙がでて、腹が立つてくるのに、自分のこととなると、いやだって思う》 (F子)

先生、今日の4時間目、とても感動しました。特に先生自身の話のとき、涙が出ました。顔が熱くなって何もしゃべれなかった。先生はえらいと思う。

おじいちゃんと、話をしました。川端の原田という地域が部落だそうです。じつは、私の住所

は川端字原田です。私はびっくりしました。でも、私の家は、道路ぞいにあります。部落は私の家のうらからだそうです。はじめ「いやだ！」って思っていました。おじいちゃんから、私の家は部落には入ってないって聞いたときは、ものすごくホッとした。それでハッとした。これも差別ちがうかって、先生の話の聞いていると、涙がでて、腹が立ってくるのに、自分のこととなると、いやだって思うんです。ものすごく、つごうのいい心だなアって思いました。

YYさんのふるえながら、言っているのを聞いて、差別するのが、差別しているのが、バカらしくなってきました。差別のむごさも少しずつわかってきました。

世の中にまだ差別があるのを気付かないのは、その人自身にある、差別の心に気付いていないからだと思います。

《わが胸の思い》

(森口 健司)

ほとんどの生徒が、私の思いに応え、目には涙さえ浮かべ、絶対に差別をしないと誓う。しかし、自分が被差別の立場であると思ったときに、やっぱりいやだと思う。口ではいろいろな思いが表現できるのに、自分自身が同和問題と正面から関わっていくことを心の底でおそれている。そんな人間としての弱さは、だれの心の中にも潜んでいる。私はその部分をしっかりと洗っていく同和問題の学習を築き上げていかなければ、人間として本物にはなっていくと思う。

人間の内側に潜んでいる他人事としてとらえる心、自分以下を求めていく心を洗い流していくことは、とてもつらいことであるかもしれない。でも、そのことを続けていかなければ、この問題の真の解決はないと考える。

同和問題の学習に取り組んでいく中で問われていくもの、それはどれだけ被差別の立場に立ち切ることができるかということであり、同和問題を学ぶということは、人間として同和問題にかかわって、どのような生き方をしていくかを自分自身に問い続けることでなければならないと思う。

私は部落に生まれた、部落に生まれなかった、それぞれの立場は違っても、それぞれの教師が、人間として同和問題に関わってどのように生き、どのように苦しみ、どのように悩み、どのように悲しみ、そして、その苦しみや悩み、悲しみの中からどのように生きる展望をつかんでいったか。また、今どのように部落差別を解消しようとし、自分自身の差別心を洗い続けているのか。そんな教師自身の生き方、生きざまを生徒一人一人にぶつけ、生徒自身の生き方そのものを問いただしていく。そんな営みの中で痛みを持った生徒に生きる展望を持たせて胸をはらせていく同和問題の学習ができていくのではないだろうか。私は同和問題学習の営みとは、まさしく教師自身の生き方そのものをぶつけ、生徒自身の生き方を問いただしていく営みだと考える。

12月13日の「私の目を見て！」の全体学習の最後に、自分の本当の思いを仲間と語ろうとして涙で言葉をつまらしてしまったK子が、本年度の11月第21回徳島県中学校同和教育研究大会の前、学年全体による同和問題学習（全体学習）の中で変わってきた自分を次のように記している。

《中学2年の時から今までの全体学習で、自分が変わっていったのが、目に見えるように自分でもわかります。完全に変わったというまでは行かないかもしれないけど、自分を隠し続けること

の恥ずかしさを知りました。中学2年の時の最初の全体学習の時は、他のクラスの授業を見ているだけでも、何か逃げ出したい気持ちでいっぱいでした。本当に本当に部落出身という自分が嫌でした。友だちにも隠そうと思っていただけ、森口先生の熱心さに引き付けられていったと思います。今、初めてずっとずっと思っていたことを書くんですけど、私が今まで担任を持ってくれた先生は、口先だけで「差別はいけない」と言っているのだと思っていました。でも、森口先生はただ口先で言っているのではなく、本当に心から言っているのがわかりました。みんなも私と同じように思っているだろうと思います。だから学年全体での同和問題学習が、だんだん真剣に取り組めるようになってきたんだと思います。》

このK子の思いは、対象地区生徒だけでなく、すべての生徒の中に流れる思いだと思う。生徒はいつも思っている。

「この先生の言葉は、心の底からの言葉だろうか。この先生は、先生自身の生活の中で、どのように部落差別解消のために頑張っているのだろうか。この先生は、部落差別の中をどのように生きてきたのだろうか。そして、自分の本当の思いをぶつけたとき、この先生は自分をどこまで支えてくれるだろうか。」

生徒たちは、部落差別という悲しみと不安と恐れの中で揺れ動いている。生徒は発言をしないという教師の歎きをよく耳にする。その歎きを聞くたびに思う。自由に思ったことが言える雰囲気学級の中にできていなければ、生徒の本当の思いは語られることはないんだ。すべての生徒の思いの中に、「自分の中にある不安や悲しみをみんなが受け止めてくれるのなら、少なくとも先生が自分の体を張って、自分の生き方を通して受け止めてくれるのなら、その思いをみんなに語りたい。聞いてもらいたい。そして、そのことが言えたらどんなに自分は救われるだろうか。」という思いがあると思う。

それが生徒の本当の思いだと信じる。しかし、その思い以上に本当のことを言ったら、「ばかにされる。一人にされていく。差別されるかもされない。」そんな不安の方が絶対的に大きいという悲しい現実を私たちはしっかりと見つめていきたい。そして、生徒たちを最も絶望させていくのは、教師の裏切りであり、消極的な姿であり、しらけた姿だと思う。

人間は誰も裏切られたくはない。誰も騙されたくはない。でも、同和教育の営みが研究会のためだけの取り組みであつたり、部落差別の悲しみを他人事にとらえる教師の姿に気付いたとき、生徒たち（特に対象地区の生徒たち）は、先生に騙された。先生に踊らされたという悲しみが残っていく。この同和問題学習の営みとは、教師と生徒、生徒と生徒、すべてが人間として、信頼し尊敬するということが土台になる。そして、教師自身が部落差別の中をどのように生きてきたという教師の生きざまや生き方が、語られることから学校における本当の同和教育に真のスタートは切られる。

教師にとって同和教育とは何なのか。いつ、どこで、どのように部落問題と出会い。どのように生きてきたのか。どのように自分を変革させたのか。教師自身の生き方がまず最初の教材となるように思う。

1991年度の授業実践は、私自身の生きざまをさらけ出すところから始まった。